

歴史は未来の羅針盤

温故知新

これまで刊行しました、『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第三巻「近世編」、第四巻「近現代編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第七巻「日野商人編」、第八巻「史料編」は、教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中です。ぜひともお買い求めください。

去る三月、『近江日野の歴史』第四巻「近現代編」を刊行いたしました。さまざまな資料をもとに、

明治時代から現在までの日野を詳細に描いています。温故知新でも今月から近現代の日野の姿を、シリーズで紹介いたします。初回は、明治初めの宗教の動きです。

神仏分離

明治維新によって誕生した明治新政府は、神道国教化政策を推し進め、次々と指令を出していきました。そのなかでも有名なのは神仏分離です。江戸時代までは神と仏は同じものとして信仰されていましたが、政府は神社から仏教色を除こうとしたのです。明治元（一八六八）年三月、政府は神仏分離指令を出し、仏教色のある神社名の変更、神社からの仏像・仏具の移動を命じました。地方によっては寺院や仏像を破壊する動きも起きています。

日野の神社でも神社名の変更や仏像・仏具の移転がありました。

蔵王の蔵王神社は金峯神社に社名を変更し、小谷の竹田神社では観音像が円林寺に移されています。また、十禅師の比都佐神社では現在重要文化財に指定されている石造宝篋印塔を破壊から防ぐため一時期地中に埋めています。しかし、日野町では神仏分離も徹底して行われなかったようです。今でも町内には仏像や経典が伝えられている神社があります。

また、政府はそれまで人々に親しまれた信仰を押しさえつけ、天長節（天皇誕生日）などの天皇関係の祭りを行うことを推し進めました。西大路村など一三方村がそれまで行われてきた愛宕講・伊勢講・野神講といった行事を廃止する、天皇関係の祭りを行うことを取り決めていますが、その後もこれらの講は続けられてきました。

宗教の動向

神道の布教も盛んに行われました。明治八年、全国的な神道の組織として神道事務局が設けられました。その支局として明治十年十月、馬見岡綿向神社（村井）に馬見岡神道事務支局が置かれ、日野周辺の布教活動が本格化します。支局では神官の集会が開かれるほか、他の地域の神官を招いて学校などで説教会を行うなどの活動をしています。

一方、仏教側では、政府が住職や檀家がいらない寺院を中心に統廃合すすめたことから、寺院はあの手この手で存続をはかります。中山の金剛定寺では、当時檀家がいなかったことから、「叡山講社金剛組」という組織をつくりました。そして聖徳太子ゆかりの寺であることや毎年二回「天下泰平」などを祈願することを強調し、講への加入者を集めました。加入者には



▲馬見岡神道事務支局が置かれた馬見岡綿向神社
大正7(1918)年6月以前の撮影

法名を与える、二円奉納すれば三〇年間木製のお札を送るといった特典を付けて講への加入を勧めています。時期は下りますが、明治二十年代に入ると、日野で天理教の布教が始まります。天理教を布教したのが山添利兵衛です。山添は明治二十二年に「斯道会第二四号講」を結成し、同二十六年には日野町大窪に天理教日野出張所を開きます。これが現在、別所にある日野大教会の前身になります。このほか明治二十四年には大窪に日野天理教会が設立されるなど、新宗教の動きも見られるようになります。